Osaka Shoin Women's University Repository
The Human Science Research Bulletin
2003, No. 2, 83-91

「物性心理学」による現代文明・文化論
——心理材質論的人間学の試み——

心理学科　鳥山平三

抄録：物性心理学的観点から見ると，人間の性格のタイプは4類型に分けられる。すなわち，人間が使用する「物」の特性から連想される，「木の性格」「鋼の性格」「布の性格」，そして，「プラスチックの性格」である。「プラスチックの性格」とは，軽薄で，脆く，無機質で無情な，冷淡で自己中心的な特性が著しい。現代人の多くは，ともすればこの性格に陥りやすい。したがって，親や教師は子どもたちを，努めてその反対の「木の性格」になるよう育て，導くといいだろう。「木の性格」は，優しさ，しなやかさ，生きんとする活力，温かさ，有機性，そして，したたかさと粘り強さを有している。

索引語：物性，木の性格，鋼の性格，布の性格，プラスチック性格

は　じ　め　に

20世紀は人類史上未曾有のまさに物質文明が最高度に隆盛をきわめた時代であった。自然科学の画期的な進歩により，幾多の理論や実験の成果として，人々の生活や行動に大いに役立つ製品やシステムが開発され，身辺の物事をより大きく，より早く，より強く，より高く，より広く，より細かく，より精確に，そして，効率よく処理できるようになった。実に科学の精華であり，人々はそこから生み出される技術の恩恵を多大に受けたのである。華々しいところでは，宇宙への飛躍を可能にしたコンピュータやロケットの創造，安全で快適な，また，スピーディーな移動を助けるジェット機，超特急電車，そして，自動車，建物でいえば超高層ビルや空調システム，同じその電気を使用するテレビ，洗濯機，掃除機，冷蔵庫，照明設備といった家庭電気器具，そして，軽くて量産のできる化学合成の人工繊維の発明である。今やこれらのすばらしい優良品なくしては，地球をめぐる宇宙船の中の飛行士や大小の都市のみならず山村や僻地・孤島に住む人々の生存は一日でさえ危ぶまれる状況となっている。つまり，人々はまだまだ自然の中から糧を得ながらも，自然を操作し，改良し，コントロールしようとしているのである。にもかかわらず，自然災害である地震や火山の噴火，台風・サイクロン・ハリケーンの猛威，干ばつや冷害に対しては，ただ耐えるしかできない。また，巨大建築物の倒壊や火災時の熱と煙には，ただ逃げるしか方法がない。自然の圧倒的な力の前では無力な姿をさらし，自然を制御するはずの構築物のトラブルやアクシデントには痛恨の被害者となるのである。今日の人々の置かれている状況は，相も変わらぬ天災に対する弱者であり，輪をかけて人災の仕掛け人といった愚のていたらくを演じる舞台となっているのである。

「物」は確かに巷に満ちあふれ，豊かな物質文明が展開されている。しかし，その「物」に取り囲まれ，使いなじんでいるうちに，人々は逆にその「物」に染まってしまい，時に「物」に動かされ，支配されている図が見えてくるのではないだろうか。つまり，「物」が人々を作り，変え，翻弄し，悩ませている，そういう逆説が引き出せるように思われる。本稿ではそのように「物」の側から見えてくる現代の人間模様を，特に「物」の影響下にある人々の「心の特性」に注目し，いくつかの指摘を供することにしたい。

Osaka Shoin Women's University Repository

1．“物性心理学”の視点

20世紀には画期的な「物」がふんだんに発明され，改良され，性能や品質が格段に向上した時代といえる。その象徴的な材質が「プラスチック樹脂」ではないだろうか。化学の得意とする有機合成化合物のうち，変幻自在で多用途にかなう見事な素材の原点が「プラスチック樹脂」である。語源は「可塑性のある」という意味の「プラスチック」(plastic) の「樹脂」(resin) であり，用途に合った形に量産でき，硬軟の度合いも適宜加えることができ，色合いも鮮やかなものからくすんだものまでお好み次第である。軽くてツヤがあり，透明なものや半透明なもの，角張ったものや丸みのあるものまで，安価で簡便に製品化できるのが強みである。密閉できる容器から，通気性の浸透膜まで，材質としての柔軟性はまさに「プラスチック」である。

しかし，この便利で重宝と褒めそやし，手軽に手に入れ気軽に使用しているうちに，人々はだんだんと「プラスチック樹脂」に使い慣れると同時に，心までも「プラスチック樹脂」化していっているのではないだろうか。すなわち，元来は寛容な素材であったはずが，一旦原料に熱が加えられて溶かされ，型にはめられ冷やされてしまうともう変容不可能という不可逆性の堅さがある。つまり，融通のきかない狭量さ，衝撃や高熱に脆い耐性不良，無機的で軽薄，時に冷たささえ催すことがある，といえる。「プラスチック樹脂」に囲まれての生活のうちに，知らぬ間に心までが染まってしまい，現代人は「プラスチック心性」に陥ってしまっているのではないだろうか。

「プラスチック心性」とは，「プラスチック樹脂」から連想できる物性の敷き写された特性のことである。まず，本物とはいえない“まがいもの”である。「……もどき」といった表現がふさわしい代物である。たとえば，“陶器・磁器もどき”，“漆器もどき”のお皿やお碗，重箱やお盆，会席膳やおはしなどがある。綿や麻や絹や羊毛に代わる化学繊維，服地やストッキング，紙おむつや防寒具，寝袋やテント布，そして，いろいろなスポーツ・ウエアーがある。その他，木や竹のものから変じたまな板，弁当箱，桶，たらい，椅子，フェンス，園芸の支柱，子どものおもちゃなどがある。鉄やその他の金属の代用としての屋根の樋，水道管，電気器具や自動車のボディー，あるいは，ガラス使用の代わりの油や調味料の容器，シャンプーや化粧品の容器，などなど，今や数限りなくある。いずれも用途には見合っているものの，どこか軽薄で安直な印象を与える「もどき」である。事実，新しい間はつるつるピカピカで光沢があり，若々しくておしゃれな感じである。駅のホームやバスの停留所の待合いの椅子や公園のベンチ，冬は腰を下ろすのに冷たそうだし，２，３年もするとひび割れして黒い縞模様が見えたり，風化して色もあせてしまっている。もう修理する訳にもゆかず，取り替えるだけである。古くなって廃棄物として処理しようにも，燃やせば高熱を出して焼却炉をいためてしまうようだし，中途半端な燃やし方をすると発癌物質のダイオキシンを発生させるようだし，そのまま土に埋めても分解するのに何年もかかるらしいのである。まったく始末に困る厄介物なのである。

この「プラスチック樹脂」の効用といえば，水に強いということであろうか。そのために，水筒やペットボトル，カップ麺の容器やスナック菓子の袋や包装紙，バケツやポリタンク，魚のトロ箱や保温・緩衝材の発砲スチロール，植木鉢やプランター，そして，小型漁船やボートに使われている。耐久性は度外視して，ただ軽くて清潔，カラフルで斬新な形状に，いかようにもデザインでき，量産しやすいということであろう。しかし，この水が染み込まず，水に浮く性質が，逆にあだとなり，捨てられ放置されて，海や湖水にいつまでも漂い，水辺や野山に周囲にそぐわない人工色が散乱し，トロ箱や廃棄ボートが砂浜や漁港に無惨にも打ち上げられている，といった情景を作り出しているのである。

これらの「プラスチック樹脂」の功罪相半ばする特徴は，ある意味で人類の英知の成果であり，そのうま味の利便性を味わう代償としてそのツケを払わされているのかもしれない。現代に生きる老若男女の生き様の戯画として，「まがいもの」の人間像が随所にその類似物を生み出している

Osaka Shoin Women's University Repository

と思われる。すなわち，「女もどき」の女性，「男もどき」の男性，「母親もどき」の母親，また，「父親もどき」の父親，そして，「子どももどき」の子ども，「おとなもどき」のおとな，が非常に多いということである。いずれも自然さを失った人工物の傀儡のように，似非物としての人間性欠如の体たらくである。その本質は，軽薄で短絡的，奥行きがなく懐が狭い，無機的で冷淡，わがままで自己愛的，さらに欲求不満耐性のなさと脆さである。さらに，熱気と衝撃に弱く，小さな傷から破綻を招き，残り腰がないためにあっさりと挫折してしまう。有効な修理と模様替えがきかないために，使えなくなると廃棄されるだけである。

2．「木の性格」と「プラスチックの性格」

米国の心理学者のベム（Bem, S. L., 1974）は，「性役割尺度」を考案し，成人男女を4つのタイプに分類した。すなわち，Mとは男性度が大であること，逆に，Fは女性度が大であることである。そして，mは男性度が小であることで，fは女性度が小であることを示している。これらの組み合わせにより，4つのタイプができあがる（Fig. 1）。すなわち，「1」MF型は，男性度と女性度が共に高い「男女両性型」である。「2」Mf型は，男性度が高く，女性度が低い「男性型」である。「3」mF型は，男性度が低く，女性度が高い「女性型」である。そして，「4」mf型は，男性度も女性度も共に低い「未分化型」となる。

ここで「1」MF型は，男性性と女性性をほどよく兼ね備えていて，状況に応じてそれらを使い分けることのできる人である。別名「心理的男女両性性」(psychological androgyny) とも呼ばれ，いろいろな局面において柔軟で臨機応変の対処ができ，仕事や子育てにおいても成功する確率の高いタイプといわれている。また，「2」Mf型と「3」mF型は，それぞれ伝統的な男性型と女性型に相当し，常識的に男性役割か女性役割をこなすだけで，その域を越えることのできないタイプである。そして，「4」mf型は，いわばまだ性別役割意識に目覚めていない，未熟でどっちつかずの幼児的タイプである。

ここで「心理材質論」(鳥山，1986) の紹介をする。古今東西において人々が使用してきて，今なお生活において用いる物の材質にはそれぞれ心理学的形容がなし得ると思われる。その代表的

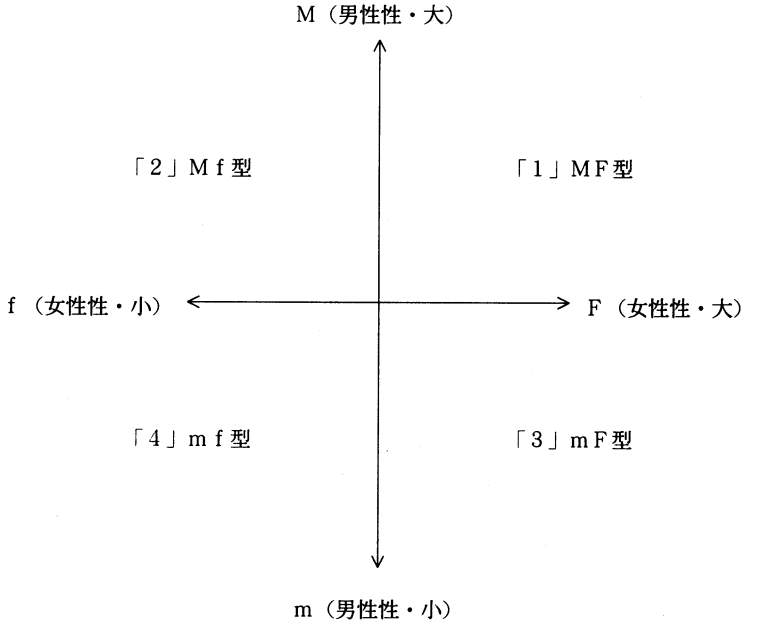

Fig. 1　ベムの性役割タイプ（Bem, 1974）

Osaka Shoin Women's University Repository

な4点を取り上げ，その心的特性を適宜当てはめてみると次のようになる。

①「木の性格」とは，有機的で可塑性があり，ぬくもりがあり，しなやかでしたたか，粘りや奥深さがあり，強い意志性があり重厚である。

②「鋼（はがね）の性格」とは，無機的で，硬く冷たい，衝撃ははねかえすが包容力がない，強い意志性はあるが頑固で無慈悲なところがある。

③「布の性格」とは，やわらかくてしなやかで，ぬくもりがあり包み込む優しさがあり，相手に合わせる寛容さはあるが，逆に弱くて脆い面もある。

④「プラスチックの性格」とは，無機的で可塑性がなく，軽薄，浮薄，薄情で冷たい，粘りもなくしたたかさもなく，脆く，うわべだけの偽物である。

もちろん，これら4材質以外にも石・土・粘土，ガラス，紙，皮革，貝殻，ゴム，あるいは，コンクリート，などなどあるので，確かに選択が恣意的であるうらみはあるが，ここは直感と感性により独断的に「材質論」を述べることにする。

さて，ここで上に挙げたベムの「性役割タイプ」の図に，「心理材質論」の4類型を当てはめてみると Fig. 2 のようになり，かなりうまく重合するように思われる。

第一の「木の性格」(木質の人）は，男性性と女性性をほどよく備えており，父性も母性も必要に応じて発揮することができる人である。さらに，意志性や情緒性にも富み，粘りもあり，重厚味もあり，したたかさもある。また，ぬくもりがあり，しなやかで，愛他的な人ということになる。あらためて述べるまでもなく，「木」は生態系の象徴であり，その繁茂する姿こそ生命力のバロメーターである。心もそれにあやかり緑なす葉陰にいたいけのない子どもや病んだ人を憩わせ癒す営みに自ずからかもし出されることであろう。

第二の「鋼の性格」(金属質の人）は，いわゆる男らしい男の持ち味といえるが，力のあるところ肉体労働により自然を改良し，征服し，自然を破壊する暴挙をも繰り返してきた強い性格である。さらにまた，たくましさと闘争心が褒めそやされ煽られて，喧嘩や戦争の凶事の張本人を作り出してしまった。しっかりとした意志性は必要であるが，寛容性と柔軟性が，今日，求められているのではないだろうか。

第三の「布の性格」は，かつては女性や母親の特性として備わっていた従順さや包容性に見られるものである。成長とともに環境側からの要請により，生きるために受け身で仕方なく身につけさせられた特性かもしれない。“ふろしき”のように，どんなものでも包むことができる。町に

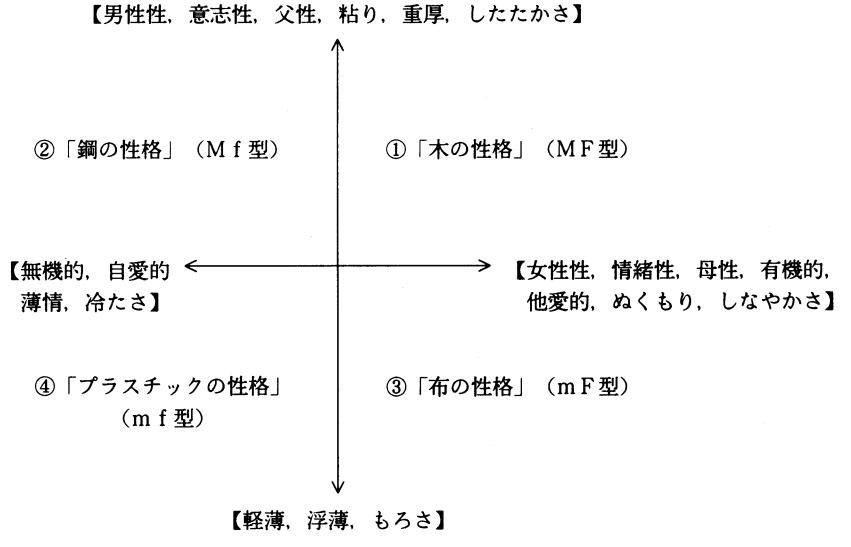

Fig. 2 「心理材質論」による性格類型（鳥山，1986）

Osaka Shoin Women's University Repository
出てもどる我が子を，成功者も失敗者も，あたたかく迎え抱擁してくれる“おふくろ”のぬくもりがある。体を包み，温め，装い，ペルソナを満たしてくれる優しさがある。しかし，その柔らかさとか弱さが，数限りない女たちを悲しみの涙と無念の悔しさへと追い込んだ怨みがある。現代は，しなやかさと同時にしたたかさも必要なのではないだろうか。

そして，第四の「プラスチックの性格」は，男なのか女なのか不分明のまぎらわしいもので，育て損ないともいえ，育ち損ないともいえ，正体不明である。機能不全の家族の中で育った“アダルト・チルドレン”かもしれないし，見捨てられ体験や幼少期の心的外傷のゆえに境界性人格障害や反社会性人格障害，あるいは，自己愛性人格障害や回避性人格障害になっているのかもしれない。また，性同一性障害により，「男もどき」「女もどき」の中途半端なありようも，この性格のなせるわざであろう。これはあまりにも生活環境が「プラスチック樹脂」に覆われているために，その材質が知らぬ間に心を侵し，心が自然にのびやかに育まれなくなった証拠ではないだろうか。「プラスチック心性」とは，この天然の素材には見られない疑似物の表す，無味乾燥で，噛んでも味のしない，しらけていて淡々とした無機質の心をいうのである。

今日の難題は家族のあり方，学校の使命，政治や経済の不確定性，犯罪集団の跋扈と治安の生ぬるさにある。いつの時代にも同じようなことが綿々と続いてきているが，牽強付会ながら，どうも根本に「プラスチック樹脂」が植え付けた「プラスチック心性」があるように思われる。男が「布の性格」，女が「鋼の性格」を示すことがあるゆえに，「母らしからぬ母」，「父らしからぬ父」，「先生らしからぬ先生」，「政治家らしからぬ政治家」，そして，「おとならしからぬおとな」が多いゆえに，家庭も学校も，国も地域も，混沌として招かれざる無秩序と酷薄さを引き寄せてしまい，息苦しくあえいでいるのではないだろうか。ここはじっくりと「木の性格」を育み培う育児と教育と政治が何よりも望まれるところである。バランスのとれたエコロジカルな「木質心性」こそ，未来の希望といえるだろう。

「現代は『ボーダレスの時代』であるとか，『際くずれの社会』であるといわれる。それよりも私はむしろ『マージナル・エイジ』と呼ぶ方がよく，男女や父母，障害者と健常者，老若，民族問題など，境界線をまたぐ辺境でさまざまな適応上の摩擦が生じていると考えたい。私の『心理材質論』からいえば，現況は『プラスチック社会』である。20世紀を代表するプラスチック樹脂は，一見よく整って見栄えはいいが，軽くてもろくて柔軟性がなく冷たい。人間もしたがって『プラスチック心性』に染まり，粘りなく奥ゆかしさもなく懐も浅いといえよう。悪徳商法や新宗教，占いや自己啓発セミナーなどがはやるのも，人生の難事を安直に軽薄に処理しようとして『プラスチック的』にそれらに頼ろうとする人が多いからである。＜中略＞

結局，私の説く，『木の心』が大切なのである（ドイツの童話作家のミヒャエル・エンデも同じことを言っている)。比喩的にしか言えないが，木は育てられ，育つものである。プラスチックのように型にはめられ，それっきりということはない。その気さえあれば柔軟に形を変え，しなやかでぬくもりがあり，したたかに生き，年齢とともに渋さや重厚味を増していくはずである。木は衝撃にも強く，弾力的で回復力がある。人の心が『木質』になれば，社会も『木質』になり，他愛的で優しくなるだろう。炭酸同化作用が増し，酸素も豊富で，心身に傷を受けた弱者にも生きやすい社会となるだろう。汚れて酸素欠乏状態になっている社会の炭酸同化作用を活発にするのが社会臨床家であり，その活動の理論と実践が『社会臨床心理学』であると言えよう」(鳥山，1994)。

3．食べ物と心

ファーストフード症候群

現代の食事事情も大きく変わった。まだまだ国々や民族，地域には伝統的な食事文化があり，連綿と受け継がれ，家庭やレストランで味わうことができる。食材は，動物の家畜や海の魚介類

Osaka Shoin Women's University Repository
から野菜，果物，茸類，海草類などなどと，今も昔も変わらない。調理方法は，オーソドックスなものが厳然と受け継がれている一方，日夜新手法が試みられ編み出されてもいる。動物の肉や野菜などの品種改良がなされたり，バイオテクノロジーによって奇妙であるが安全なものも相次いで食材化されている。人々が生きるための食べ物がいろいろと工夫され，栄養と美味，そして，料理の美学が展開されているのはひとつの大きな文化である。その文化に，画期的な転機をもたらしたのが20世紀後半の“食生活のプラスチック化”である。すなわち，食べ物にまで，軽薄で短絡，安直で「……もどき」を生み出しているのである。

体が食べ物により作られていることは言うまでもないが，実は心もそれに劣らず影響を受けているのである。インスタントラーメンにはじまり，レトルト食品，カップ麺，そして，半調理の冷凍食品が，ごく普通の家庭のメニューに取り入れられて久しい。巷には，ファーストフード店が，大きな町にも小さな町にも，もう目白押しである。現代，もう3，40代の人々は生まれて後間もない頃から，インスタント食品とファーストフードの恩恵（？）を受けて，育ってきたと思われる。それらの食品は，安価で便利というだけではなく，一応栄養面にも配慮はなされているといわれる。確かに，空腹は満たされるのであるが，あいにくそればかりではカロリーは足っても，栄養のバランスがかたより，カルシウムやミネラル，無機質やビタミンといった栄養素に不足があるらしい。加えて，脂肪分や糖分，塩分が多めで，食べ過ぎるとコレステロールが血管に沈着したりして，高脂血症や高血圧，糖尿病や肥満といった生活習慣病の温床となりやすいそうである。子どもたちにもその弊害がすでに及んでいると指摘されて久しいし，働き盛りの人々にも容易ならぬ病原となっている。このようなインスタントおよびファーストフードが，体にとって好ましくないことはこれで明らかであろうが，実は，ここで論じたいのは，これらの食品の心に及ぼす影響のことである。

最近，心に溜めがなく，すぐに“キレて”しまう青少年や母親・父親の行状はまさに「ファーストフード症候群」とでも名づけられるものであろう。カルシウムやミネラルの摂取が足りないためとよくいわれるが，それもあるだろうが，それと同時に，心がインスタントに即席に沸騰して，興奮をコントロールできないためだろうと推測される。

また，味の濃い食べ物を食し続けると，心は「酸性」になると思われる。対人関係を形容すると，酸っぱい，苦い，辛い，しょっぱい，しぶい，となるであろうか。若い母親や父親の我が子に対する接し方にそれが現れていないだろうか。幼児虐待（child abuse）の悲劇がこのところ頻繁にニュースとなっている。夫や恋人（男）による妻や恋人（女）への暴力（DV; domestic violence）もホットな話題である。米国における深刻な事件も彼らのハンバーガーとコカコーラ文化のせいだといえるかもしれない。また，中学生や高校生の，進学にプレッシャーのある思いから，親や友人，時に，見ず知らずの人に対して「酸性」の攻撃性を向けているのではないだろうか。リトマス試験紙は「赤く」なり，周りに危険信号を発していることになる。「酸」に侵され，心は溶かされ，ただれて，むれて，やけどさえしそうな症状である。これはもう危うくて，苦しくて，とても耐えられるものではない。残念ながら，親子関係や学校の現場において深刻な事態になっているのではないだろうか。

その「酸性」の反対は当然「アルカリ性」である。リトマス試験紙が「青くなる」性質である。交通信号としては，安全に「進め」の合図である。つまり，人間関係があっさりとして，淡泊で，密着せず，お互いを尊重するものである。「木」のぬくもりがあり，さっぱりとしてつかず離れずのほどよい距離をとってくれる。すばらしい感触である。だから，安心して関係を続けられるのである。

食事の話にもどると，やはり，おふくろの手料理でなくても，それぞれの家庭の下手でも自前の手作りの料理こそ，高脂血症や「酸性」を防ぐ一番の体への栄養のみならず「心の糧」となるものではないだろうか（鳥山，2000）。

Osaka Shoin Women's University Repository

カウチポテト症候群とペットボトル症候群

最近の，いわゆるスナック菓子というのは，原料の豆，麦，米，いも類，コーン，ナッツ類や干し魚類などをそのまま加工するのではなく，一旦細かく粉砕して，その粉末を混ぜ合わせ，色や味付けをして，子どもや若者にはおいしそうな色とりどりの，かわいい形の一口サイズのお菓子に仕上げている。味も甘いのや辛いのや，ピリっとしたのや香料のエッセンスが入っているのや，濃いめの味も気になるが，それ以上に心配なのは，しっかりと歯で噛み砕く必要がなく，口の中で唾液にまじっていればほどなくとけてそのまますぐに飲み込めるということである。そして，食べ始めたら TV のコマーシャルにあるように「やめられない，とまらない」で，袋が空になるまでいくらでも食べ続け，それだけでお腹が一杯になり，ごろんとカウチ（ソファー）に寝そべって TV や漫画を見るだらけた生活で，運動不足にもなるということである。これが「カウチポテト症候群」といわれるものである。

人間の子どもは，噛むことによりあごの骨を丈夫に発達させ，また，噛む動作が脳に伝わり，脳の働きを全体として活性化させるのだといわれる。昔からの豆菓子や米菓子などは実に噛みごたえがあり，味もあっさりとしていたし，スルメや干し芋などは何度も何度も噛んだりしがんだりしなければならなかった。噛めば噛むほど味があったものである。そうして粘り強い，辛抱強い，根気のある人間ができあがったのではないだろうか。

また，子どもたちの好む清涼飲料水も厄介なものである。ウーロン茶や番茶はまだいいのであるが，特にコーラやジュースといった甘味料の入ったものはくせ者である。上に述べた「カウチポテト症候群」と同じように，１日に１リットル入りのペットボトルを１本すべて，あるいはそれ以上を飲んでしまう子どもや青年がいる。もう癖になってしまいがぶがぶと飲んでいるうちに，中に含まれている砂糖が大量に体内に入り，カルシウム分を溶かしてしまい歯や骨をもろくして，乳歯どころか永久歯までもボロボロにしたり，手足が骨折しやすくなったり，糖尿病にさえなる危険性があるということである。子どもがほしがるからと，いつも冷蔵庫に備えてある清涼飲料水で，子どもたちは「ペットボトル症候群」に追い込まれていくのである。

このように，まことに心も体も食べ物により育まれ，影響をさまざまに受けることがわかるであろう。「物」が独立変数で，心の問題は従属変数なのである。

結　　語

本稿では，われわれの身の回りにある「物」の材質，そして，日常の食生活で何気なく習慣的に摂取している食べ物が，「心」に作用して，心を侵し，心を歪め，心をひずませている，といった指摘を行ってきた。「物性心理学」などといった分野が本当に成り立つのかどうか心許ない懸念もあるが，ひとつの試論として，現代の人間模様と文明と文化の功罪を読み解く手掛かりになるのではないかと，「物」と「心」を掛け合わせたものである。

現世にはあまりにも「プラスチック」的な物があふれかえっている。本物よりも偽物の方が存在感を主張していさえする。いわゆる偽のブランド品の値打ちはそれなりにあるようである。それはそれとして見抜いての値踏みであれば，文句はないが，本物として手に入れたのに，実は偽物だったとなると，この落とし前は誰がつけてくれるのだろうか。似たようなことがあちらこちらに多発している。話は跳ぶが，たとえば，財団法人臨床心理士資格認定協会の発行する「臨床心理士」なるものも真贋が問われるきわどいものである。まさに「プラスチック資格」と呼びたいものである。「臨床家もどき」「まがいもののカウンセラー」を量産している。玉石混淆といえるように，すぐれた人がいないでもないが，あまりにもインスタントで軽薄な奥行きのない「臨床心理士」が，軽率で浅薄な活動をしている現状を憂えることになる。「木質のカウンセラー」が好ましいと，常々思っている。

Osaka Shoin Women's University Repository

引 用 文 献

Bem, S. L. 1974, The measurement of psychological androgyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 42, 155-162.

鳥山平三，1986，大学生の性役割意識と適応指標　第19回全国学生相談研究会議，山形シンポジウム報告書，山形大学，11-18.

鳥山平三，1993，育てあい：発達共生論――育児と療育の社会臨床心理学――，ナカニシヤ出版

鳥山平三，1994，社会臨床心理学，伊吹山太郎監修，現代の心理学――研究の動向と展開――，有斐閣，69-79.

鳥山平三，2000，現代とカウンセリング――家庭と学校の臨床心理学――，ナカニシヤ出版

Osaka Shoin Women's University Repository

A Treatise about Modern Civilization and Culture from the Viewpoint of the Psychology of Matter: An Opinion about the Relations between Mentality and Quality of the Using Materials.

Heizo Toriyama

Abstract: There are 4 types of human characters from the viewpoint of the psychology of matter. Those are wooden, steel, cloth and plastic characters. The plastic character is characterized with frivolous, fragile, inorganic, heartless, coldhearted and egoistic trait. Modern people is apt to fall into this character. If possible, parents and teachers bring up or train children toward the wooden character. It has gentle, flexible, heartily, warm, organic and persevering characteristic.

Keywords: quality of matter, wooden character, steel character, cloth character, plastic character.